

秩父今宮神社崇敬会(仮称)

「会報」第二号

平成十九年九月一日

八大龍王神を奉祀した

「役行者」に報恩感謝を捧げる

役尊神祭を斎行

恒例の「役尊神(役行者)祭」が六月三日、崇敬者多数が参列して執り行なわれ、当神社の地に八大龍王神を奉祀した役行者に報恩を捧げ、あわせて世界の平和を祈願しました。今年はとくに、比叡山延暦寺の執行や叡山学院長などを務めた同寺長騰の小林隆彰師が参列し、行者像の前に「観音経」を奉読されました。また花園神社宮司の片山文彦師、高円寺氷川神社宮司の山本雅道師、春日大社前権司の中東弘師など、神道界の第一線で活躍の各氏も列席されました。祭典後には会場を移して講演会が開かれ、小林師が「末法の世を救う龍神信仰」と題して話されました。そのあと懇親会も催されましたが、多くの崇敬者が最後まで残って交流を深め、「現代社会に信仰心を呼び戻すにはどうしたらいいか」「今宮神社を盛り上げるには何をすべきか」など、熱心に語り合いました。



役尊神大前に観音経を奉読する小林大僧正

比叡山延暦寺長騰の小林大僧正が特別参列

役行者様に観音経・表白を奉読

和合の時代と平和な社会を願う
神社界からも多数列席

役尊神(役行者、役小角)は飛鳥・白鳳時代、全国の霊山や霊地を巡って修行を続け、のちに「修験道」信仰の開祖とうたわれるようになった尊者です。大宝年間には、ここ秩父地方に飛来し、感ずるところあつて今宮神社の地に、水の神であり観音菩薩の守護神でもある八大龍王神を祀りました。神仏習合の一大霊場としての当神社の歴史は、この役行者に始まったといつても過言ではありません。「役尊神祭」は、行者のこの尊徳に報恩を捧げるお祭りです。あわせて、行者の神仏和合の精神を引き継いで世界平和を祈念するものです。

◆ ◆ ◆
当日の「役尊神祭」は境内の行者堂(役尊神祠)で、塩谷治子宮司を祭主に、塩谷崇之禰宜と西澤形一神主を祭員として執行されました。

まず修祓で参列者一同が清まつたあと大前に一拝し、献饌に続いて祭主が祝詞を奏上。神変大菩薩(役小角命、役行者)の神徳を讃えるときにも、以来、秩父の里が潤い続けてきたことを感謝し、さらに神仏和合の時代の到来を念願しました。(2面につづく)

九月二十八日「例大祭」のご案内

別途ご案内のとおり、九月二十八日午前十時半より、平成十九年「例大祭」が執り行なわれます(受け付けは九時半から)。

例大祭は神社の根本的なお祭りです。御祭神に報恩感謝の念を捧げ、私たち家族や地域や日本、そして世界の安穩無事を祈念します。祭典・直会に続く記念講演では、東京・新宿の花園神社宮司で東京女子医大、元講師の片山文彦氏がお話をされます。

(1面からのつづき)
 続いて小林師が観音經・般若

心經を奉ずるとともに表白文を
 読み上げ、神仏の守護により平
 和な社会が顕現成就するよう祈
 念を込めました。同時に宮司を
 はじめ当神社の関係者が八大龍
 王の深慮を深く体拝し、その威
 徳を宣揚しながら世界浄化のた
 めに日夜、誠を捧げていること
 を讃嘆、奉告し、諸願の成就を
 願いました。(表白文の抜粋を
 第三面に別掲)

このあと杉本昌子権禰宜が豊
 栄之舞を奉納、雅遊会(宮道朝
 子代表)が雅楽を奉演。さらに
 表千家・小菅桂子さんによる献
 茶があり、最後に参列者全員が
 次々と玉串を奉りました。

祭典終了にあたって宮司は
 「はるばる比叡山から小林大僧
 正の、また神社界の先生方や崇
 敬者の皆様の参列をいただいて
 行者祭を執り行なうことができ
 たことは嬉しいかぎりです」と
 感激の面持ちで挨拶しました。

「日本の信仰は『神仏同座』」

祭典後の講演会で小林師

直会のあと一同は、長瀬町の

祭典終了にあたり挨拶する
 塩谷宮司



養浩亭に移動し、講演会と懇親
 会にのぞみました。

講演会で講師を務めた小林師
 はまず、「修行に年限はなく、
 巡礼を続けるという形はお参り
 の基本」「神道は生きることの
 意味を積極的に見出す現世肯定
 の宗教」「仏教は人生の否定か
 ら入っていく三世の宗教」「神
 道の儀式と密教の儀式は互いに
 影響している」などと話したう
 えで、日本の信仰の世界は、こ
 れら様々な宗教が渾然一体とな
 った「神仏同座」の世界である
 と説きました。そして「神と仏、
 これが互いに理解しあって、一
 つになって、日本人の救い場所
 となっている」と語りました。
 (3面につづく)

ご挨拶

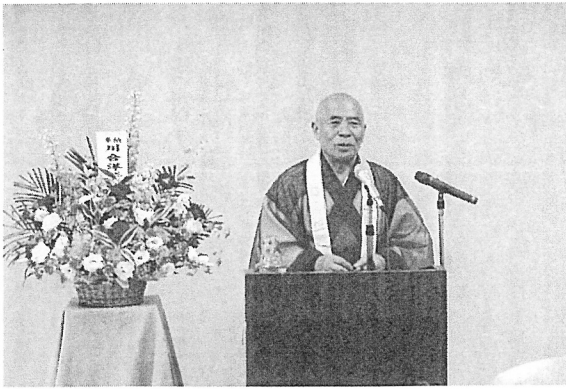
今宮神社 禰宜 塩谷崇之

秩父の街もようやく猛暑のピークを越え、涼しい風を感じられる
 季節になりました。皆様方には、日頃から、当社の活動をご理解い
 ただくとともに多大なご協力をいただき感謝の念に堪えません。

当社は古くは修験の道場であり、そこは関東甲信越の修験者たち
 の一大拠点として栄えてきました。私の先祖である歴代「今宮坊」
 も、修験者として、秩父を拠点としつつも、諸国を巡り、縦横無尽
 の活躍をしていたようです。かつて修験者たちは、民衆が土地に縛
 られ、また交通網の整備もなかった中世・近世の時代に、山づたい
 に自在に移動して諸国を往来しました。山岳での修行を通じて人並
 み外れた能力のみならず、天文、治水、鍼脈、薬草等の実学を身に
 つけ、さらに自由に諸国を往来して他国の文化に触れ、最新の学問
 と最先端の技術を身につけました。こうして「今宮坊」は、それぞ
 れの時代において、秩父における最先端の知識と技術の拠点として
 発展し、そこに集う多くの修験者たちがそのメッセンジャーとして
 の役割を果たしていたものと思われまます。

その後、明治に入り修験道は一旦廃止され、戦後再び復活したも
 のの、近代化の流れで、その役割は変わりつつあると思います。地
 球規模での環境破壊が進む中、自然の中に神仏を感得しようとする
 修験道の「精神」が改めて見直される一方で、文明の発展により人々
 は誰でも自由に移動できるようになり、野山を駆けめぐらなくとも、
 居ながらにして知識・情報を修得できる時代になりました。そのよ
 うな中で、修験者たちがかつて社会で担っていた役割・機能を、どの
 ように実現してゆくのか。修験道の精神が、一部の「愛好家」の心
 の中にとどまらず広く人々に共有され、社会の中に定着してゆくた
 めにも、この問題を真剣に考える必要があると思います。

秩父今宮神社は、日々ご神前において自然の恵みに対する感謝の
 念を捧げつつも、そこに集う皆様方に、この問題を一緒に考えてゆ
 くための「道場」とそのメッセンジャーを社会に発信してゆくための「拠
 点」を提供し続けたいと考えております。



『末法の世を救う龍神信仰』と題して講演する小林大僧正

(2面からのつづき)
 さらに小林師は、「『神さま
 仏さまは本当におられるのか』
 とよく聞かれる。仏教では最高
 の仏の世界を光明として象徴す
 る。神道でも天照大神は光であ
 る。光があるからこの世がある
 のだと考えれば、もうお分かり
 と思う」と述べ、さらに、仏に
 なるうとしていた菩薩も、迷い
 の人々を両手で救い出す光とし
 ての無限の働きを示していると
 して、「神仏同座」の世界にまし

ます諸仏諸尊の尊さを諄々と説
 きました。
 そして講演の主テーマである
 「龍神」については、「『欲し
 い』『妬ましい』『憎い』など
 など人間の醜い心が分かかってお
 り、それを何とか良い方向へ持
 っていこうと、自らも修行しつ
 つ人々の苦しみを除こうとされ
 ている」と、その神格の配慮を
 推し量りつつ、「今、日本も世
 界も滅亡的におかしくなってい
 る。『それではいかん、ダメだ』

と、人間の一番近いところで心
 配しているのが龍神さんだ」と
 話しました。
 混乱した社会を、神仏を拝し
 つつ改めていく生き方について
 小林師は、「人間は何しに生まれ
 てきたのか。人間に生まれただ
 けでも大変なこと。自分中心ほ
 どお粗末なことはない。『人の
 為、国家の為、世界の為』と、
 『為に』ということを念頭に生
 きてほしい。龍神や諸尊もそれ
 を願っている」と語りかけ、参

小林隆彰大僧正「表白」

(抜粋)

(前略)

謹シミ敬テ本尊界会諸尊聖衆
 此ノ靈域ニ来臨ノ一切ノ三宝
 ノ境界ニ白メ言ク
 方ニ今 今宮神社ノ梵場ニ於
 テ叡岳ノ凡僧某 志誠ヲ捧ゲ
 世界ノ平和ト我ガ日ノ本ノ安
 寧、殊ニ八万民ノ豊楽ヲ祈念
 センガ為ニ 妙法蓮華経觀世

音菩薩品ヲ読誦シ奉ラントス
 (中略)

都レバ今宮神社塩谷治子宮司
 ハ当社八大龍王尊ノ神徳ヲ深
 ク体解セラレ 尊神ノ威徳ヲ
 宣揚シテ沙界浄化ノ為ニ日夜
 ナシ
 誠ニ宜ナル哉ト言ウツベシ
 然レバ諸天善神ハ宮司ガ懇念
 ヲ承知シテ善願必ラズ成就シ
 玉ウラン
 (後略)

加者一同は一つひとつに領きな
 がら聴聞していました。

参列者からは賛嘆の声

参列した崇敬者からは、年々
 隆昌する「役尊神祭」に対して、
 役尊神や八大龍王神ほか諸尊・
 諸神の発揚を肌で感じたとする
 賛嘆の声が多く聞かれました。

また、列席の神社関係者か
 らも後日、祭典の成就を慶祝し、
 今宮神社の今後ますますの隆盛
 を願うねんごろな手紙や礼状が
 届きました。



ところで、当神社の「行者祭」
 ですが、江戸時代には「秩父靈
 場の開祖」ともいえる行者に対
 する報恩の祭祀が行なわれたと
 いう記録が神社所蔵の文書に残
 っています。明治になると行者
 祭は廃絶し、以降は途絶えたま
 までしたが、平成七年、当神社
 に役尊神祠が完成し、同十一年
 には「役行者千三百年大御忌」
 に当たって祭りも再興。以来、
 毎年六月に「役尊神祭(役行者
 祭)」を執行して報謝の念を捧げ
 ています。

今宮トピックス

神社の二ニュース・
出来事を
ご紹介します

半年の穢れを流す 「夏越の大祓」

今年前半の穢れを祓い、後半に向けて新たな活力をいただく「夏越の大祓(なごしのおおはらえ)」が六月三十日夕方から執り行なわれました。約五十人が参列しました。全国の崇敬者、約二百五十家族・千人からお預かりした穢れを託した人形(ひとがた)が、神前で「霊水」に浸され一人ひとりの名前が読み上げられて清められました。このあと一同は上長瀨の荒川に降り、川で禊を修めた神職たちによって人形は流され、無事、罪穢れが祓われました。

「定期研究会」 いよいよ発足

崇敬者ら有志が中心となって発足を準備していた「定期研究会」がいよいよ始まることになり、その第一回が十月二十八日(日)に開催される運びとなりました。講師は日光修験の法頭、伊矢野慈峰師。当神社と関係の深い教育評論家でセルティック・プロジェクト・マネジメント株式会社代表取締役の小谷一氏の協力もいただくことになりました。内容の詳細は未定ですが、宗教や神道をめぐる様々な問題がテーマとなりそうです。

巨大な「さざれ石」 を奉獻

秩父の霊山、武甲山のふもとで発見された巨大な細石(さざれいし)が搬出のち当神社に運ばれ、五月十四日、境内に奉獻されました。正式な学術名称は「石灰質角礫岩」といいますが、国歌「君が代」に歌われている、あの「さざれ石」です。当神社崇敬者代表を務める小鹿野町在住、鷹塚忠男氏の奉納によるものです。

仮本殿にガラス窓の 風防戸

仮本殿の斜め後方と側面に、ガラス窓を張ったステンレス製の風防戸が設置されました。状況によって開け閉めのできるもので、崇敬者の集まりである江戸川講(稲生喜久子代表)の絶大な篤信により設営が実りました。八月二十六日、受渡式が行なわれました。

若手らが修験の 合同合宿へ

修験道に関心のある若手崇敬者や神職見習いの出仕者らが神道修験の合同合宿を行なうことで準備、調整を図っています。再三の説明のように、当神社はもと神仏習合の一大霊地であり、修験道にも縁の深い神社であることから、修行、勉学にのぞもうと青年たちが自主的に発案、計画しているものです。

叢文社会長が 古代史の新著

当神社の崇敬者であり、東京都文京区の出版社「叢文社」の会長である伊藤太文氏がこのほど、新著『日本誕生史―実年代と史実―』を上梓しました。発行は叢文社です。珍説奇説をふくめ諸説が紛々と渦巻く古代史研究の世界で、「合理的な手

法」 「科学的論理」によって古代天皇(大王)を中心とした実年代を明らかにし、古代史の転換に迫ろうという意欲作です。神武天皇、神功皇后、欠史八代の大王などの「非在論」が「どんな論拠で生まれたのか、今もってさっぱり解らない」と伊藤氏は不満を述べます。「非在論」から「実年代」へ――。氏の三十年におよぶ研究の成果が盛り込まれています。昨年逝去した古書店役員、鳥海ヤエ子氏との共編。その鳥海氏と、山口県の地方史家、板谷政典氏が特別寄稿しています。

なお、叢文社は「秩父今宮神社一八〇〇年史」の発行元でもあります。

年に二回は正式参拝

―御祈願日―

金・土・日・月曜日

電話で予約のこと

塩谷宮司の旧著

『ふろしきのこころ』

改訂復刻を願う声高まる

―再刊実現に御協力お願いします―

塩谷治子宮司が昭和六十二年に著した『ふろしきのこころ―私と教育』に目をとめた教育関係者や宗教者から、同書の復刻・再刊を望む声が届き、その後、図らずも何人かの崇敬者から同じような要望が社務所に寄せられました。「へ風呂敷のこころ」という絶妙な尊意に敬服した」「二十年前の教育に対するメッセージだが、今の時代にも即応するものだ」等々の感想です。

同書はすでに絶版となっており、発行元・発売元から購入することは現在、不可能です。思いを寄せて下さった方々は、古書店か図書館で、あるいは諸団体の発行物が同書を抜粋・引用したものなどを読んで感銘を受けたもののようにです。

『ふろしきのこころ』は、大学卒業後、中学校教師を経て民間教育の実践に転身し、「ふろしき塾」主宰、NHK学園・リーダー養

成塾講師、長寿社会文化協会(WAC)組織委員などを務めた塩谷宮司が、教育実践の経験と思索から紡ぎだした成果や報告をつづつたもので、子育てから生涯教育にまで視野を広げて人間教育のあり方や理念を展開しています。(当時、塩谷氏は神職資格は取得したものの、宮司でも禰宜でもありませんでしたが)

同書が教育理念の柱・キーワードとした「ふろしき(風呂敷)のこころ」は、宮司の言葉を借りれば、単なる一枚の布切れに過ぎないのに、大箱でも丸いボールでも一升瓶でも実によく包んでしまう、T(時)・P(場所)・O(目的)によって使い分けられ、不要なときは小さく分けて、いざ必要ときには自由自在に姿を変えて相手のために存在しようとする、ときにはつながって大きくも、紐にもなる、そこには相手を思う無私と愛がある―そんな風呂敷の持っている性質、「こころ」です。他者に対して「ふろしきのこころ」を持ち、教育では「ふろしきのこころ」で子どもたちをそっと包みこみながら自主自立を支える。たしかにこの「こころ」は今の社会に欠落している、

しかし是非とも必要な心です。本書発刊の当時は「受験地獄」が社会問題になっていたわけですが、現在では子どもや青少年を巡るおぞましい事件が連日ニュースになっています。いや、大人の社会でもそうです。

その意味で、本書の再刊を切望する声が聞こえてくるのは当然であり、また本書が多くの人々の目に触れることには大きな意義があることでしよう。崇敬会設立準備委員会としても是非、改訂・復刻、そして再刊が実現することを願うとともに、皆様のご協力・ご協賛とお知恵を賜ればと考えている次第です。

今宮参拝者「生の声」より

喜び、感動、感心、(そして、ちよっぴり不満?)など、今宮神社をお参りした感想、観想を「生の声」でうかがいたいと思います。常連さん、フラッと惹き寄せられて手を合わせた人、巡礼者たち……。ひとまず今回は某・崇敬グループのメンバーの「声」です。

▼今宮神社との出会いは、三ヶ月前に体調の異変に気づき病院

へ行ったところ、癌と判明し、ショックで落ち込んでいた私を友人が誘ってくれたのがキッカケでした。病氣と立ち向かう勇気が湧きました。おみくじが必見です。その時の自分の気持ちピタリと出ます。

(田中てる子さん)

▼今宮神社の大きな御神木で心が清められ、御神水で洗われ、心広く豊かな想いの日々です。そして神様がこんなに近い存在に感じたことも、とても嬉しくありがたく思っております。

(佐野和美さん)

▼私が今宮神社に始めてお参りしたのは、とても不思議なタイミングでした。ご神木や神社の雰囲気がとても素晴らしく、何度か足を運ばせて頂く度に宮司さんや神主さん、神社の皆様方の温かい人柄に触れ、何事にも前向きに取り組めるようになりました。

(久米淳子さん)

▼ちよっぴり二年です。私が今宮の神様、今宮のお水に出会ってからは……。その間、私は色々な局面で衝撃的な救いを今宮の神様から頂き、大変感謝し且つ熱烈に今宮を愛しています。この腕に「今宮・お水・命」と彫り物をいれても良いとまで思っております。(遠藤知江子さん)

